

横浜合唱協会 第63回定期演奏会



2013年11月4日(月・祝)
めぐろパーシモンホール 大ホール
主催：横浜合唱協会

横浜合唱協会 第63回定期演奏会

モテット ～神への讃美～

J.P.スウェーリンク (1562-1621)

Cantate Domino / 主に向かって歌え

Diligam te, Domine / 主よ、わたしは御身を愛し奉る

Hodie Christus natus est / 今日、キリストはお生まれになった

D.ブクステフーデ (1637-1707)

Canzona in G, BuxWV170 / カンツォーナ ト長調 (オルガン曲)

J.S.バッハ (1685-1750)

Komm, Jesu, komm, BWV229 / 来たれ、イエスよ、来たれ

— 休 憩 —

F.メンデルスゾーン (1809-1847)

Herr, nun lässest du deinen Diener in Frieden fahren, op.69-1

主よ、今こそあなたはこの僕を安らかにいかせ給う

Jauchzet dem Herrn alle Welt, op.69-2

全地よ、主に向かって喜びの声をあげよ

J.ブラームス (1833-1897)

Warum ist das Licht gegeben dem Mühseligen, op.74-1

なぜ悩み苦しむ人々に光は与えられたか

O Heiland reiß die Himmel auf, op.74-2

おお、救い主よ、天を開いてください

J.S.バッハ (1685-1750)

Duetto III, BWV804 / デュエット第3番 ト長調 (オルガン曲)

Singet dem Herrn ein neues Lied, BWV225

主に向かって新しき歌を歌え

指 揮: 八尋 和美
オ ル ガ ン: 山口 綾規
チ ェ 口: 伊藤 恵以子
コ ン ト ラ バ ス: 河原田 潤
合 唱: 横浜合唱協会

ごあいさつ

本日は横浜合唱協会第63回定期演奏会にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。
今回は、2年ぶりのアカベラコンサートとして、スウェーリンク、バッハ、メンデルスゾーン、ブラームスのモテットをオルガン曲を挟みながら演奏致します。時代が異なる4人の作曲家の作風を純正調の美しいハーモニーで表現できるように、日々練習を重ねてまいりました。17世紀から19世紀に架けてのモテット「神への讃美」の世界をパーシモンホールの音空間の中で少しでも感じ取って頂ければ幸いです。

次回は来年10月にドイツライプツィヒAMICI合唱団・合奏団との合同演奏会を計画しております。引き続き皆様方のご支援をお願い申し上げます。

2013年11月4日
横浜合唱協会 代表 堂崎 浩

プロフィール

八尋 和美 (やひろ かずみ / 指揮)

東京芸術大学音楽科卒業。音楽を矢田部勤吉、指揮法を渡辺暁雄の諸氏に師事。芸大卒業と同時に東京混声合唱団の創立に参加。以来、東京混声合唱団のコンサートマスターとして、同団のトレーニング、編曲、指揮者として活躍。1973年、東京混声合唱団指揮者に就任。同団との全国的な演奏活動の他、アマチュア合唱団の指導、合唱指導者の育成にも優れた手腕を発揮している。1982年、文化庁芸術家在外研修員として旧東ドイツを中心に研鑽を積む。1997年、東京混声合唱団正指揮者に就任。現在、くらしき作陽大学客員教授。横浜合唱協会は1973年より指導。

山口 綾規 (やまぐちりょうき / オルガン)

早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。東京芸術大学音楽学部別科オルガン専修を経て、同大学大学院修士課程音楽研究科(オルガン)を修了。これまでにパイプオルガンを田中由美子、ブライアン・アシュレー、廣野嗣雄の各氏に師事。東京を中心に、アメリカ、中国、マレーシアなど国内外で積極的に演奏活動を行っている。クラシックからジャズ、ポピュラーまで、ジャンルの垣根を超えた多彩なレパートリーには定評があり、例年開催しているリサイタル「オルガン・エンターテインメント」では、自身の持ち味を存分に発揮している。作編曲や後進の指導、執筆など、活動のフィールドは広い。2011年よりクイーンズスクエア横浜のクリスマスイルミネーション「シンギングツリー」の音楽制作を手掛けている。日本オルガニスト協会会員。全日本ピアノ指導者協会(PTNAピティナ)正会員。昭和音楽大学非常勤講師。

伊藤 恵以子 (いとうえいこ / チェロ)

東京芸術大学附属音楽高校を経て同大学、同大学院博士課程修了。チェロを三木敬之、R・フラショー、倉田澄子の各氏に師事。日本音楽コンクール入選。1982年から2年間パリエコールノルマルで学ぶ。芸大在学中バッハカンタータクラブに所属し、小林道夫氏の指導の下で数多くの宗教曲に触れる。現在、ピアノ四重奏Ensemble Delice、Luce、ピアノとのデュオPiacevole、ハーブトリオなどの室内楽、モダンとバロック楽器での合唱の伴奏やアンサンブル等、様々な演奏活動を行っている。訳書に「ポール・トルトゥリエ チェリストの自画像」「メニューインとの対話」がある。

河原田 潤 (かわらだじゅん / コントラバス)

福島市出身。県立福島高等学校卒業。福島大学教育学部小学校教員養成課程卒業。その後音楽の道を志し、武蔵野音楽大学大学院音楽研究科(コントラバス専攻)修了。コントラバスを村上 満志、ツォルト・ティバイ、佐々木 等、檜山 薫の各氏に師事。室内楽を金谷 昌治、故 清水 勝雄、ロバート・バート、故 ウルリヒ・コッホの各氏に師事。

コントラバス奏者として室内楽、国内の主要なプロオーケストラに出演、また国内外の著名なバレエ団(Kバレエカンパニー・松山・ポリショイ・キーロフ・シュツットガルト・ローラン＝プティ等)、オペラ(故・ルチアーノ・パヴァロッチェ ファイナルワールドツアー日本公演、アグネス・ヴァルツァ リサイタル日本公演等)のオーケストラで首席奏者として活動。その実績により、レニングラード国立歌劇場管弦楽団の日本公演の際、客演として参加した。

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル、アンサンブル・エスプレッソ、ヴェリタス室内オーケストラメンバー。現在常葉大学短期大学部保育科(音楽科兼任)准教授。

曲目解説

本日の曲目はドイツモテットの比較的良く知られた曲で、横浜合唱協会でも取り上げたことのあるレパートリーから選んで「神への讃美」としてまとめました。なお、スウェーリンクは作曲家としても作品としても初めて取り組みました。

◆ J.P. スウェーリンク (1562 – 1621)

スウェーリンクはオランダの作曲家で、ルネサンスからバロックへの転換期に、アムステルダムの教会オルガニストとして活躍しました。

バロック鍵盤音楽を基礎付け、門下からはP.ハッセ、シャイト、シャイン、シャイデマン、J.プレトリウスといった優秀な弟子が巣立ち、その中からはバッハへと連なる「北ドイツオルガン楽派」の人々も輩出しました。

モテットにおいても、ルネサンス音楽の頂点を成したフランドル楽派とイタリアバロックのヴェネツィア楽派の技法を融合させています。伝統的な教会旋法と近代的な調性の間を行き来するその音楽の魅力は、今回取り上げたモテットでも味わうことができます。

Cantate Domino, canticum novum / 主に向かいて新しい歌を歌え

ヒポイオニア旋法で“Cantate (歌え)”の円弧を描くような音型が模倣され、少しずつ変形しながら何度も繰り返されます。結びでは“mirabilia eius (主の奇跡)”が頻出し強調され印象的に締めくくられます。

Diligam te, Domine / 主よ、われは御身を愛し奉る

ドリア旋法の“Diligam te, Domine”によるフーガで始まり、“Dominus firmamentum (主は私の支え)”がポリフォニーで歌われ、結びでは“liberator (救済者)”がメリスマで強調されています。

Hodie Christus natus est / 今日、キリストがお生まれになった

イオニア旋法で“Hodie, hodie (今日、この日)”がホモフォニーで4回にわたって曲の区切りの冒頭で歌われ、モチーフのように響き、付点を伴うヴェネツィア風の祝祭的なポリフォニーで歌い継がれます。

◆ D. ブクステフーデ (1637 – 1707)

Canzona in G / カンツォーナ ト長調 (BuxWV170)

17世紀の北ドイツを代表するオルガニスト、ブクステフーデは、数々のオルガン曲を残しました。彼が40年の永きに渡ってオルガニストを務めたリュベックの聖マリア教会には、実に規模の大きいオルガンがあったため、その低音を活かした作品が多く残っているのですが、手鍵盤のみで演奏される曲はごくわずかしきありません。本日演奏する「カンツォーナ」は、このごくわずかな手鍵盤のみで演奏される曲の一つで、タイトルからも判るように、イタリアに由来する器楽曲の形式をとり、4/4、6/8、3/2と途中で拍子が大きく変わるたびにフーガの主題も変化します。

◆ J.S. バッハ (1685 – 1750)

Komm, Jesu, komm / 来たれ、イエスよ、来たれ (BWV229)

ライプツィヒ時代の葬儀の曲ですが使用機会は不明です。歌詞はヨハネ14章6「私は道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」に由来した6行詩の葬儀用讃美歌集から第12節を採っています。第1節は第一楽章の“二重合唱”に、第2節は第二楽章“アリア”と記された4声合唱に当てられました。曲はBWV225の二重合唱モテットとは趣が異なり、対位法よりも和声法に重点が置かれ、歌詞を前面に出し、減7度音程や不協和音で、葬送に対応しています。

第一楽章 3つの部分に分けられます。

第一部 冒頭二つの合唱が①Komm (来たれ) を各3回づつ、ト短調 (g-moll) で和音を変化させる掛け合いで開始します。「ヨハネ受難曲」「葬送カンタータBWV21」等バッハがト短調声楽曲で見せるイエスへの強い呼びかけのアフェクト (心情) が込められています。次に②die Kraft verschwindt (力は消え) の下降音型、③Ich sehne (私は憧れ) とホモフォニーが続き、④der saure Weg (苦難の道) で減7度下降音程を含む厳しいカノンが現れ、二つの合唱が交互に苦難の二重カノンを奏でます。

第二部 休符を挟んで音楽のアフェクト (心情) は急転換。⑤Komm, komm, ich will (来て、来て) から軽やかなマドリガ的な音の動きとなり、両合唱が交互フーガで自由な呼びかけの中で、苦難は忘れ去られ、嘆きはイエスへの深い信頼のなかで解消されていきます。

第三部 ⑥Du bist der rechte Weg (あなたは正しい道) の美しい旋律に乗せて、両合唱が交互に最初はホモフォニーでついで長いメリスマを持つポリフォニーで掛け合いを演じ、旋律は変奏でさらに輝きを増しながら、最後には両合唱が一体の8声合唱になり楽章を締めくくります。

第二楽章 第1節の大規模な聖句モテットに対して、同じ長さの6行詩の第2節は比較的単純な4声“アリア”です。しかし通常の「終結コラール」とは異なり、「定旋律」はなく、転調が多く、跳躍音や装飾音、不協和音等、高度の技法が使用され独自の様式を生み出しています。

◆ F. メンデルスゾーン (1809 - 1847)

Herr, nun lässest du deinen Diener in Frieden fahren

主よ、今こそあなたはこの僕を安らかにいかせ給う (Op.69-1)

Jauchzet dem Herrn alle Welt / 全地よ、主に向かって喜びの声をあげよ (Op.69-2)

メンデルスゾーンが亡くなる1847年に、イギリス国教会典礼のOp.69-1は晩禱用、Op.69-2は早禱用に作曲されました。従って英語歌詞に曲付けされ、死後の1848年にドイツで出版する際にドイツ語訳が付けられましたが訳者は不明です。

Op.69-1の歌詞は、「主が遣わすメシアに会うまでは、決して死なない」との御告げを受けていたシメオン老人が、ようやく主に出会い「主よ、今こそあなたはこの僕を安らかにいかせてください」と発するものですが、38歳の若さで夭折したメンデルスゾーンに重ねるのは何とも辛いことです。ヨーロッパの諸都市から引っ張りだこで超過労状態にあった彼には、当時の旅は危険を伴う厳しいものであり、現代の神ならばドクターストップを告げていたのではないのでしょうか。

曲は「安らかにいかせてください」のフーガで始まり、Soloと指示された「私はこの目であなたの救いを見たからです」を経て、「異邦人を照らす光」「イスラエルの誉れ」が付点リズムを伴って強く歌われ、冒頭の「安らかにいかせてください」が繰り返されて締めくくられます。最後に典礼で定まっている「父と子と聖霊に栄光あれ」の小栄唱が添えられています。

Op.69-2は詩篇100が歌詞で、「全地よ、主に向かって喜びの声をあげよ」と、「彼は神、我らの主」がトゥッティで力強く歌われ、「おお、感謝しつつ主の門に進み」で短調のメロディがテノールから開始して、ソプラノ、バス、アルトと続きます。最後は「なぜなら、主は思いやりがあるから」と締めくくられます。やはりここでも小栄唱が添えられています。

祖父が高名なユダヤ人哲学者で、父の代にプロテスタントに改宗し、自身は幼いときにプロテスタントの洗礼を受けたメンデルスゾーンですが、カトリック、イギリス国教会、プロテスタントと宗派を問わず、このような典礼の珠玉の曲を生み出しました。しかし残念ながら、この年の11月4日脳溢血で亡くなりました。臨終に立ち会ったピアニストで作曲家のモシュレスは「天使のように安らかな彼の顔つきには、彼の不滅の魂が押されていた。」と語っています。

◆ J. ブラームス (1833 – 1897)

Warum ist das Licht gegeben dem Mühseligen

なぜ悩み苦しむ人々に光は与えられたか (Op.74-1)

O Heiland reiß die Himmel auf / おお、救い主よ、天を開いてください (Op.74-2)

Op.74-1はドイツレクイエム完成から約10年後の1877年、交響曲創作に注力していた頃の作品です。歌詞は「ヨブ記」を主に、それに関連した聖書句で、曲は四楽章で構成されています。

第一楽章 歌詞はヨブ記第3章の20-23節で各節ごとに区切って曲付けされた4区分から成ります。ヨブの発する“Warum? (なぜ)”の自問、怒りが二短調(d-moll)の変化する和音で各節に登場します。短調宗教曲が通常第三音を本来よりも半音上げ(ピカルディ三度)明るく響かせて終止しますが、ブラームスはこれを逆進行させ、ピカルディ三度で開始して暗い響きへと移行させます。これをモチーフとして「ヨブの苦悶、怒り」が4回形を変えながら歌われます。

第二楽章 一転素朴な舞曲風カノンで、「天の神に向かって(エレミアの哀歌)」神の救いを求めます。

第三楽章 ゆったり、穏やかに「ヨブの忍耐」を称えます。(ヤコブの手紙)

第四楽章 バッハがよく使用したルターのコラール「安らぎと喜びをもって、私は逝く」にドリア旋法で和声付けしています。

全楽章の約6割を占める長大な第一楽章が神学的な問いかけとなり、第二楽章以下はその応答となっています。

Op.74-2は1863-4年頃にウイーンで書かれた「コラール変奏曲」ですが、上記の曲と合わせてOp.74として1877年に出版され、ブラームスと交流が深かったバッハ研究大家シュピッタに献呈されています。

変奏曲の傑作を残すことは大作曲家の証でもあり、バッハ「ゴールドベルク変奏曲」、ベートーヴェン「ディアベリ変奏曲」等がすぐに浮かびますが、ブラームスも「ヘンデル、パガニーニ、ハイドン、シューマンの主題による変奏曲」の傑作を残しています。

この曲ではアウグスブルク1666年のコラール旋律を主題とし、歌詞は「ケルン聖歌集(1623)」からの5節で構成しています。コラール旋律は1,2節ではソプラノ、3節ではテノール、4節ではバスへと移しながら変奏を深めていきます。5節ではソプラノに戻りますがコラール旋律自体をかなり変形したものにします。最後はメリスマを伴ったアーメンのカノンで締めくくられます。

◆ J.S. バッハ (1685 – 1750)

Duetto III / デュエット 第3番 ト長調 (BWV804)

1739年に発表された『クラヴィーア練習曲 第3部』は、数々のコラール編曲や自由形式の作品など全27曲から成り、うち「デュエット」が4曲含まれています。ここでいう「デュエット」とは、2声の鍵盤楽曲のことを指し、小品ながらも、それぞれふんだんに技巧が凝らされているので、2声のみのシンプルな音楽の可能性を存分に感じさせてくれます。本日演奏する第3番は、舞曲風のリズムにのって、音楽が心地よく流れていきます。

◆ J.S. バッハ (1685 – 1750)

Singet dem Herrn ein neues Lied / 主に向かい新しい歌を歌え (BWV225)

この曲に関してライプツィヒ聖トーマス教会には、バッハとモーツァルトの歴史的出会いを生き生きと伝えるエピソードが残されています。1789年旅の途中で訪れたモーツァルトは、聖トーマス合唱団がこの曲を歌い出だすと、「これは何ですか?」と叫び全身全霊が耳になった。合唱が終わると大喜びで「これこそ学ぶべきところがある、素晴らしい!早く楽譜を見せてください」と叫んだ。筆写パート譜を受け取ると、パート譜を自分の周りや両手両膝、椅子の上と広げて嬉しそうに見回し時を忘れた。モーツァルトはこの衝撃を機にバッハ作品を本格的に研究し、対位

法の神髄を完璧に吸収し、晩年のレクイエムに結実させました。

このように「極め付きの対位法」で書かれたこの曲は、四楽章の壮大な構成を有し「合唱交響曲」とも言うことができ、古典派を先取りした構成と技法が駆使された「伝統的かつ新規性」完備の名曲です。

- 第一楽章** 全体はほぼ均等に2分割され「プレリユードとフーガ」の性格を持っています。前半プレリユードは3つの段落で、①Singet (歌え)の呼び交わり、②loben (讃美する)の4声自由ポリフォニー、③Israel freue (イスラエルは喜ぶ)のスィング感溢れる8声ホモフォニーと変化を見せます。後半フーガはバッハ除いて誰もこんなに長いテキストをフーガ主題にし得ないでしょう。しかも、勢いがあり印象深くバッハ声楽作品の最高峰です。ブランデンブルグ協奏曲第2番冒頭に似た親しみやすいDie Kinder Zion (シオンの子らは)で始まり、loben (讃美する)のメリスマ、Reihen (列を作って)のコロラツウーラ等、驚嘆すべき点は沢山あります。
- 第二楽章** 一転して“アリア”と記された美しい対話の曲となります。管弦楽組曲第3番で序曲と舞曲ガボットに囲まれて心に染み入るG線上の“アリア”が置かれているのを思い起こします。
- 第三楽章** 大きく変化し壮麗なヴェネツィア風の「呼びかけ」と「応答」の二重合唱となり神を讃えます。
- 第四楽章** 4拍子の前楽章から切れ目なしに3拍子の4声フーガに突入します。一楽章のフーガとはタイプががらりと異なり、即興的で自由な勢いのあるフーガで、ファンファーレのような上昇形分散三和音による歓喜の“ハレルヤ”で結ばれます。

合唱曲解説：藤井良昭 オルガン曲解説：山口綾規

横浜合唱協会第64回定期演奏会のお知らせ

ライブツィヒAMICI合唱団・合奏団との合同演奏会

曲目未定

指揮：八尋 和美

2014年10月26日(日) 横浜みなとみらいホール (大ホール)

八尋和美 東京混声合唱団指揮者就任45周年記念 東京混声合唱団特別演奏会

2014年7月25日(金) 19:00開演

渋谷区文化総合センター大和田・さくらホール

指揮=八尋 和美

ピアノ=若林 千春

尺 八=関 一郎

合唱=東京混声合唱団

- パレストリーナ作曲「バビロン川のほとりで」
- ヴィクトリア作曲「アヴェ・マリア」
- ヨハン・バッハ作曲「人生は影のごとし」
- 柴田南雄作曲「追分節考」
- 若林千春編曲「今ひとたびの」「島唄」「だんご3兄弟」
- その他

主 催=東京混声合唱団

入場料=全席自由・税込み 一般4,000円 学生2,000円(※予定)

チケット発売日=2014年3月頃予定

お問い合わせ=東京混声合唱団事務局 TEL.03-3226-9755 FAX.03-3226-9882

<http://toukon1956.com>

横浜合唱協会

横浜合唱協会はJ.S.バッハ合唱作品の本格的な演奏活動を目指して、1970年に発足したアマチュア合唱団です。以来、会員自らの企画の下、古典宗教音楽を中心とした演奏活動を行い現在に至っています。J.S.バッハを中心に据えつつ、パレストリーナ、モンテヴェルディ、シュッツ、ヘンデル等からメンデルスゾーン、ブラームス、ブルックナー等のロマン派、マルタン、ベルトなど近・現代の作曲家に至る作品を幅広く取り上げています。

指導陣は、東京混声合唱団の元正指揮者である八尋和美氏を常任指揮者とし、ピアノ伴奏者に谷口明子氏、松尾地恵子、木島千夏、小林彰英、佐野正一の諸氏をヴォイストレーナーに迎え、音楽・発声の両面から指導を受けています。これまで62回を数える定期演奏会では、小林道夫、若杉弘、黒岩英臣等の諸氏を客演指揮者として迎えました。1997年と2002年のドイツ演奏旅行では、バッハ縁りのライブツィヒ聖トーマス教会礼拝式での演奏、タールピュルゲル夏の音楽祭などドイツ各地での公演を通し、大きな足跡を残しました。バッハ没後250年節目の2000年は創立30周年にもあたり、現トーマスカントールのG.C.ビラー氏をはじめライブツィヒ関係者の協力を得て記念演奏会「BACH FEST 2000 TOKIO」を開催し、大きな反響を得ました。2004年にはG.C.ビラー氏の指揮のもと「マタイ受難曲(初期稿)」を演奏し好評を博しました。2008年夏には第3回ドイツ演奏旅行を実現しライブツィヒ、シュトゥットガルトなどで演奏を行いました。

正 会 員

[ソプラノ]

長尾 里美	平鹿 諭子	飯島 純子	新谷 暁	須賀 由美	藤井 節子	魚本 充子
山田 都	志村 知子	高田 文子	古宮真紀子	青柳 敦子	広庭 恵美	河野 敦子
渡部 園美	土田 紀子	荒井 直子	松尾 裕子	北村千恵子	川島香菜子	北原 規子
前田 佳子	大塩 亜季	小野 早苗				

[アルト]

堂崎 律子	大杉 純子	新井千鶴子	中野 理子	和田 京子	馬岡 洋子	市川 浩子
西田 和子	岩附美知子	山本久美子	藤井美智子	堀内 陽子	中山 典子	新井 光恵
水越 淳子	鈴木理絵子	那須比奈子	保田 康子	田島 京子	柏木梨重子	太田 明子
山崎 裕子	今城 明美					

[テノール]

藤井 良昭	堂崎 浩	馬岡 利吏	土井 賢一	松本恵太郎	古根 正治	清水 光洋
片岡 元彦	岡田 亮介	長谷 雅信	川越 信彰	和久井一男	岡田 淳	Barbara Jucker

[バス]

新井 隆士	大石 康夫	飯島 龍哉	天ヶ瀬圭三	山田 直樹	小澤克之助	松田圭一郎
若狭 保弘	梅原 俊之	高橋 誠	平鹿 一久	安積 和彦	西脇 弥彦	

維 持 会 員

丹内紀久代	鹿島 和子	石橋由紀子	児玉 弓子	伊藤 邦子	氣賀沢忠文	新居 康彦
竹村 重雄	万年 武	富澤 尊儀	清水 正子	梅津 実可	中山 元子	武田 サヨ
大竹 衣子	柴田 秀男	山岡 千秋	佐久間貴美	安広 百代	中西 牧子	入澤 三徳
藤井可奈子	中村小絵子	松下 孝	佐々木聡子	吉崎 桂江	友田 晃利	八尋 直美
鈴木 園子	林 雅子	柏 聡子	増村 照文	久保 祐子	村木誠一郎	山本 政之
勝山久仁子	西連寺利絵	入澤 洋子	鈴木 康司	山下 誉子	小野沢 誠	飯島 幸子
魚本 一司	平井 聡子	平井 透	茂木紀美子	石川 鮎子	笹井 平	柴田 英治
吉川由里子	陶山 悟嗣	国分エリ子	小見山雄次	正島 博政	雀部 征宜	鳥山 純一
津守 滋	土井美智子	森岡 剛	白石 洋子	日沖 憲司	本多 志織	加藤 拓朗
松田 久美	岡崎 希枝	山口 綾規	田川 正浩	木村 美保	森岡 美紀	長谷川由里子
山田多佳子	恒吉 理美	市川 純也	中村さえ子	谷口幸一郎		

横浜合唱協会ホームページ <http://www.ycs.gr.jp>